祖母の遺言

応募番号 89

八十八歳、米寿を迎えた夏、祖母は死んだ。

孫の自分に祖母の死が知らされたのは、葬式の前日だった。リクルートスーツを喪服として参加した葬式は、故人を惜しむ声よりも「キヨさんもあそこまで長生きすれば満足だろうよ」という、曖昧な同情と羨望のぼやきが多数を占めていた。

よくある老人の葬式の風景だった。

遺族たちの目に、涙がちらとも浮かばないことを除いては。

祖母と遺族たち、すなわち自分と叔母には、涙が浮かぶだけの繋がりになど、これっぽっちもなかったのだから。

孫の自分が祖母、長谷キヨの容貌を初めて知ったのは、お棺の小窓を覗いたときだった。

こけた頬に、死化粧のせいかな不自然に血色の良い唇、雪をかぶったような白髪。

これが祖母、としか思わなかった。祖母の死にたいした感情がわかないことが、ただただバツが悪かった。

孫として何かいふべきだろうか、隣の叔母を盗み見た。その叔母のしかめ面でようや

く、自分と彼女はこの居心地の悪さを共有していることに気づいた。

まるで他人の葬式に出ているような居心地の悪さと、そして違和感を。

叔母にとつても、自分にとつても、結局のところ祖母との繋がりはあつてないようなものだったのだろう。

そう考えていた。この夏の終わりまでは。

「ゆきさん、整理整頓とか得意？」

叔母が自分にそう言ったのは、祖母の葬式から四日ほど経った、ひどく暑い午後のことだった。叔母、長谷はるか、葬式の疲れか、喪服を着ていた時よりずいぶん老けて見えた。平時は涼しげであろう目元は陰しく眇められており、臉には汗が滲んでいる。その汗の粒が、夏の熱をもった陽で光り、彼女の瞬きで散るのを自分はなんとはなしに眺めた。

「ああ、遺品整理でしょう。いいですよ」

「物、多いですもんねこの家」と続けながら、叔母に洗濯物の山からタオルを渡す。彼女は、思いの外粗野に顔を拭いながら「そうなの。終わりが見えなくなつて」と返した。

漏れたため息から、彼女が心底この家にうんざりしているのが伺いしれた。

祖母の家である平屋の家は、ゴミ屋敷とまでは言えないものの、雑多で価値があるのかないのか判別できない物で溢れかえっていた。そしてその物の処分は、祖母の死後、遺族である叔母と自分の仕事としてふつてくることとなつた。

「ごめんね。本当は業者でも入れて早く片付けちゃいたいんだけど……」

「ああ、まあ、そうですね」

「うん。やっぱり文句言う人が居るらしいんだよね」

祖母の住んでいた場所は、都市部の暮らしに慣れた叔母と自分には一種特殊であった。というよりも、祖母の葬式と同様、自分たちにとっては居心地が悪いというべきかもしれない。

最寄りの駅までバスでの長時間移動を必要とする環境は、土地の住民たちの絆を強固にしたのだろう。近くにコンビニすらない不便な環境で、住民たちは助け合って暮らしている。ひるがえって、住民の結束は余所者への過剰な反発として現れた。そして、叔母と自分ではここでは異物だった。

（祖母は、この場所でどんな風に暮らしていたのだろうか）

隣人と助け合う祖母を想像しようとしても、頭の中の祖母は不自然に表情の固まった死に顔となつて出てきてしまう。血の気のない顔で隣人と談笑する祖母の想像はあまりにも滑稽で、考えるのをやめた。

「遺品整理、どこから手をつけます？」

叔母は数秒考えたのち、ぴん、と人差し指をたてた。

「二階の、元寝室」

「ッゲホ！」

襖を開けて一歩踏み込んだ瞬間、畳の上の埃が舞い上がり思わず咳き込んだ。

埃とともに、こもった熱気と饅えたような匂いが顔をなぶっていく。雨戸が閉じられて
いるのだろう。わずかな隙間から差し込む光しかないなか、ほとんど手探りで室内灯のス
イツチを探す。

ふと、手に紐状のものが触れた。それを引つぱると、二、三度点滅した後、ようやく室
内に明かりが灯る。

「うわ……」

「すごいな」と思わず言葉が溢れ落ちた。祖母が腰を悪くするまで使っていたというそ
の部屋は、少女時代を誰かが樹脂で固めて、そのまま留め置いたようだった。

繊細なつくりの人形が衣装箆筒の上に並び、初雪にはしゃいだかのように薄く白い埃を
かぶっている。小さな赤いおもちゃのピアノは、埃を払って鍵盤を叩けば、澄んだ音を響
かせた。中でも自分の目を引いたのは、豪華な三面鏡の化粧台だった。古びてはいるもの
の、細かい細工の施されたそれは、たいそう高価に見えた。

そこでようやく、叔母がこの部屋に行くように言ったわけがわかった。おそらく、この
化粧台の存在を知っており、真珠や宝石など、金銭の形で処分できるようなものがあると
ふんだのだろう。

叔母の予想通り、化粧台の右端の引き出しを開ければガーネットか何かのイヤリングが

白熱灯の光をちらりと反射した。

(抜け目ないな本当……)

若干呆れつつ、六つある化粧台の引き出しを上から順に開けていく。開けるたびに、口紅やおしろい、香水瓶や髪留めが顔を覗かせた。最後の引き出しを開けた時も、櫛か髪油でも出てくるものどだと思っていた。

最後の引き出しには、白い封筒だけが入っていた。

ゆきちゃんへ

真新しい封筒に書かれた自分の名を見て、ふ、と意識せず息が漏れた。

「は……？ 私……？」

なぜ自分の名前が書かれた手紙があるのか。そしてなぜそれが祖母の旧寝室にあるのか。動揺と次々に湧く疑問で、心臓の動きが徐々に早くなっていく。

(叔母さんにとりあえず見せよう)

混乱したまま立ち上がりかけて、思いとどまった。手紙の宛て書きは、自分の名前のみ。何度確認しても、「長谷はるか」の文字はなかった。

数秒躊躇し、結局「これは自分宛てなのだから」と言い聞かせ、手で乱暴に開封する。中を見ようと覗きこむと、古本屋でたまに鼻先をかすめる古い紙の匂いがした。封筒は新しいものなのに、便箋はずいぶん古いようだった。

三つ折りにされた、おそらく和紙だろう上等な紙の便箋を、畳の上に広げる。一行目に

目を滑らせて、すぐに理解した。

それは、祖母の遺書だった。

この手紙が見つかるのは、おそらく死後のことでしょう。

これはわたくし、長谷キヨの遺言であり、告発であり、懺悔です。

わたくしは大きな秘密をひとつばかり、墓に持っていくつもりでありました。しかし歳を重ねるにつれて、墓に持っていくには少しばかり、秘密が重くなりすぎてしまったのです。重みに耐えきれず筆をとってしまったことは、わたくしにとって恥ずべきことです。これを読んでも、読まずともかまいません。

しかし、どうか読んだならば、わたくしと同じように口をつぐみ、墓にこの秘密を持って行ってください。

それだけはどうか、お頼み申し上げます。

わたくしは、少女時代にひとり、人殺しをかばいました。そしてその殺しは、この手紙をしたためる時になっても明らかになっています。人殺しは、わたくしの幼馴染の下女でした。

いえ、これほど時間が経った今、事実をぼかして伝えるのはやめましょう。

幼馴染は愛らしく美しい女性で、彼女の下女は非常に気がきく女性でした。

二人は、(字がひどく滲んでおり読めない)

失礼いたしました。二人は、いわゆるエスの関係でありました。

同じ性をもちながら、男女のように、いえどの枠にもあてはめられない強い気持ちを互いに向けておりました。二人は同じ女学校に通ううちに、いつの間にかそのような気持ちを育んでいたのでしょう。

それに気づかなかったわたくしの愚かなこと！

せめて気づいていたならば、きつとああなる前に下女を止めることができたでしょう。

それか、幼馴染に「どうか賢明な選択をするように」と諭すことができたでしょう。

愚かなわたくしは気づかず、それぞれの誕生日に洋琴まで奏でてやっていたのです。

なんて、なんて馬鹿なことをしていたんでしょう。

それでも、二人がどんな関係だったとしても、幼馴染があんなことにならなければ、きつと下女は罪を犯さず、幼馴染は幸せに生涯を全うしたに違いないのです。

冬の、指先が震えるほど寒い日、幼馴染は事故にあいました。

わたくしの目の前でそれは起きました。

一瞬前まで、かわいらしいえくぼを見せて笑っていた幼馴染は、凍った路面でスリップした車に轢かれ、ペしゃんこになってしまいました。美しく、天使のような顔だけはそのままに、体がおかしな方向に曲がっていたのです。わたくしは、きつと何かの悪夢なのだと思います。しかしそれは現実で、わたくしの幼馴染は息も自分ではままならなくなりました。「植物状態」というのだと、幼馴染の親から伝え聞きました。幸い彼女の親は資産

家で、海外のむつかしい名前の機械を使って彼女を最期まで生かせるということでした。でも、それがなんだというのでしょうか。

幼馴染はもうえくぼを見せて笑うことはないのです。わたくしの洋琴ピアノに合わせて歌ってもくれないのです。どうしてわたくしが死ななかつたのかと、そればかり考えました。

しかし、幼馴染ほど素晴らしい女性を、神は見放しはしませんでした。

彼女の人差し指、それがわずかばかり動くようになったのです。

わたくしと幼馴染が小さいころ遊んでいたモールス信号で、彼女と「会話」ができるようになりました。そう、彼女は死んでなんかないなかつたのです。

その時の喜びが、あなたにお分りになるでしょうか。

あれほどの天国はもう味わいたくないと思うほどの幸せが。

けれどそれも長くは続きませんでした。

幼馴染は、下女と心中をしたのです。

幼馴染の細い首に、下女の薄汚い手の跡が、くつきりと残っております。彼女は今度こそ、本当に死んでしまったのです。

わたくしはその後、ひどく愚かなことをいたしました。下女をかばったのです。彼女の罪を引き受け、彼女をかくまい逃しました。

馬鹿でした。

ただ、二人の気持ちが本当なら、それは衆目に晒され、なじられるべきではないと思つたのです。それだけのために、わたくしは殺人の罪を負いました。

わたくしの家も当時資産家であり、家の恥であるわたくしは、わたくしの罪ごとなかつたものとされました。わたくしと、幼馴染と、下女は、それぞれ少しずつ愚かだつたばかりに、罪を犯し、全てを失つてしまつたのです。

これがわたくし、長谷キヨの遺言であり、告発であり、懺悔です。

そして、これを読んだあなたへ、ひとつばかりお願いをしたいのです。

化粧台の裏、文箱があります。どうか箱ごと燃やしてくれはしませんか。その中身は幼馴染と下女の手紙です。どうしてもわたくしの手では、燃やすことができませんでした。どうか、どうかお願いいたします。

わたくしの愚かさの、始末をつけて頂けはしませんか。

便箋の「愚かさ」という文字の上に置いた自分の指が、小刻みに震えている。真夏のはずなのに、芯から凍えそうだった。二、三度失敗しながら、便箋を畳んで封筒に戻す。

(何かの冗談……?)

深く息を吸つて落ち着くと、当然の疑問が湧いた。祖母と自分には何の繋がりもないのだ。なぜ、自分に宛てて手紙を残したのか。なぜ、手紙の事件から何十年も経つた今、文箱を燃やさなければいけないのか。なぜ、という問いだけが頭の中を巡る。

視線が、自然化粧台に吸い寄せられた。

化粧台の裏、文箱があります。頭の中で、死に化粧の祖母がそう喋る。唇が動いたたび、彼女の頬の乾いたおしろいにひびが入り、紅い唇には皺がよった。

気づけば祖母に背中を押されるように、化粧台の裏を覗き込んでいた。化粧台の裏板と壁の隙間には、白色灯の明かりも届かない。粘り気のある闇を、携帯のライトで追い払う。

果たして、紐で何重にも何重にも執拗に封をされた漆塗りの箱が、隙間からライトの明かりを照り返していた。

祖母の遺言をどう扱うか考えるのに、丸二日を要した。元来、即断即決の苦手なふしのある自分には、それでも早い方だった。「遺品整理で出たごみを、野焼きで処分してしまおう」と叔母が言い出さなければ、より長い時間がかかったことだろう。（後から聞いた話だと、町内会に入っていないければごみ処理場が使えないため、やむなく野焼きを選んだそうだ）

自分は、長谷ゆきは孫として、長谷キヨの始末をつけることにした。なぜ見なかったふりをしないのか、自分でもはつきりと分かっていたいなかった。

祖母が自分に頼ろうとしたという事実、それだけが祖母と自分のつながりのように思えたからかもしれない。または、少ない身内の、死に際一度きりの願いなら叶えてやらなければならぬと思っただけだからかもしれない。

祖母の思いを焼くために、野焼きの支度にとりかかった。

もともと、祖母が野焼きに使っていたと思しきドラム缶はかなり大きく、重い。叔母と交代で転がしながら運んでも、延焼しないような場所まで持つていくのには、ずいぶんと時間がかかってしまった。午前中から始めた作業は、午後二時を回ってようやく終わった。

はじめは小さかった火は、今はドラム缶の中で勢いを強め、もうもうと煙を吐いていた。隣に立つ叔母が、煙をしたたかに吸い込み「ほこほと咳き込む。横目で見れば、玉のような汗が彼女のうなじから滴っていた。「叔母さん」と、煙を吸い込まないよう小さく話しかける。だるそうに叔母が顔をこちらに向けた拍子に、汗が垂れて地面に吸い込まれていった。

「私、火を見てますから、休憩してきてください」

「ほんと？ありがと。もう腰痛くて」

叔母はそういうと、笑いながら腰に手を当てておどける。その中に、隠しきれていない疲労が垣間見えて思わず顔をしかめた。

「ありがとうね」と言いながら、叔母が去っていくのを見届ける。彼女が粒のような大ききになった頃に、ようやく懐からそれを出した。

漆塗りの文箱。主人と下女の、恋の証。そして祖母のたった一つの願い。

ほんの一瞬ためらって、けれども結局あかあかと燃える火に、遺書と共にそれを放り込んだ。ドラム缶のゴミに囲まれて、遺書の端が黒ずんでいくのをただ見ていた。

(これで良いんだ)

もうもうと空に立ち昇る煙を目で追う。祖母の体も、同じように火葬場で煙にした。しかし焼いたのは体だけで、自分には祖母の心はずっと、文箱の中にあつた気がしてならなかった。文箱が燃え、ドラム缶から立ち昇る煙がやがて細い糸となる。

そこでようやく、祖母の火葬が終わった気がした。彼女をどこかに送り出せた気がした。

「ああ、やっぱり。ゆきさんが持ってたのね、遺書」

背中から、平坦な声が投げかけられる。急に腹の底が冷たくなったようだった。

静かに振り向けば、感情をのぞかせない表情で叔母が立っていた。表情がないと、叔母がずいぶん祖母に似ていることに、その時今更ながら気づいた。

「本当は、私が始末しなきゃいけなかったのに」

そう言つて、彼女は「長谷はるか」と書かれた、黄ばんだ封筒を差し出した。

「私さあ、母さん嫌いだったんだ」

叔母は、まるで叔母ではないような口調で、そう言った。いや、「長谷ゆきの叔母」という立場のない、ただの彼女はもともとこういう人間なのだろう。蓮つ葉な口調は、彼女に自然に馴染んでいた。

「さっきの、始末って……」

言い終えないうちに、叔母は手の中の封筒。長谷はるかへと宛てられたそれを、ドラム

缶の中に放り込む。絶句する自分の目の前で、古びた封筒はじわじわと炭に変わっていく。

「そのまんまの意味」と言いながら、叔母は雑草がところどころ生えた地面に座りこむ。自分だけ立っているのもひどく滑稽で、あぐらをかく叔母の隣に座り込んだ。

色々な、本当に色々なものを燃やした煤の匂いの中、叔母は話しはじめた。

「あれね、あなた宛てじゃないんだ。円城寺ゆきさんっていう、全然別の人が宛て。私が勝手に封筒だけすり替えたの」

「封筒だけ新しかったでしょ」と言われて思い至る。叔母の言う通り、便箋が古びていたにも関わらず、封筒は変に真新しかった。あの時、とっさに「ゆきちゃんへ」という宛て書きを見て、自分は祖母が孫に宛てて遺言を残したに違いないと思いついてしまったのだ。

「円城寺ゆきさんって、もしかして……」

「手紙に出てきてた、植物人間のお嬢様」

「死んだんじゃないんですか？」

「今も生きてるよ。体はね。首を絞められたせいで脳に空気が回らなくなって脳死なだけ」

「少なくとも、母さんにとっては生きてたんじゃない」と言う叔母からは、その円城寺ゆきという女性に対しての感情は読み取れなかった。ただ、母さんと言う時のみ、伶俐な顔にわずかな怒りのようなものが垣間見えた。

「なんで封筒を入れ替えたんですか？」

なぜ遺言通り文箱を燃やさなかったのかと、暗に問う。叔母にもそれが伝わったのだろうか。今までの平坦な表情が一変する。強く噛み締めた唇にはなにかへの憎しみがにじんでいた。

「あの女の——母さんの言う通りにするのが嫌だったから。別にね、手紙燃やすくらいならなんてことないよ。そうじゃなくて、あの手紙、もう一枚便箋があったの。そこに」

叔母が言葉を止め、灰交じりの空気を吸う。彼女の表情は怒りを押し殺そうとするようでもあり、悲しみをこらえようとすることもあった。

「そこにね、追伸が書いてあったの。もし円城寺ゆきが、脳死から回復したら一枚目の手紙を送って」

「……！」

そこに至り、やっと自分が遺書の目的を誤認していたことに気がついた。あれは、そもそも文箱を燃やすことが目的ではない。円城寺ゆきを、祖母が今際の際まで想っていたことを伝えるための、そのためだけの手紙だったのだ。あれは叔母や、自分に向けた遺書などではなかった。祖母の心は、家族になど一欠片も向けられてはいなかった。

あれは、円城寺ゆきに向けてしたためられた、恋文だった。

「私、それ、なんでか許せなかったんだよ」

「許せなかったんだ」と呟く叔母からは、先ほどの怒気も悲哀も感じられなかった。ただただ、なにか大きな感情を吐き出してしまった後の、虚脱だけがあった。

祖母の遺言

思わず、叔母の背に触れてさす。

同情を感じさせないように、ただ労わるように。

「だからあんな、あなたと間違えるような宛て書きにした。もう一枚の便箋を抜き取った。私が死んでもあなたへの遺書と間違われるように」絶対に私を見ない祖母に復讐するため。それも聞こえるのは、自分の考えすぎなのだろうか。触れている叔母の背は、いつの間にか細かく震えていた。

ドラム缶の火はもう消えかけている。祖母が残したものは、もう一つもない。祖母は恋だけ抱えて、一条の細い煙として晴天に消えていった。